

2 「尖閣研究」シリーズ こうしてできました

戦後の尖閣初期調査 全員の実体験 手記に活写

2005年頃から、尖閣諸島をめぐる沖縄側の動きを調べることにしました。資料収集に着手して驚きました。

尖閣に関する琉球政府の公文書、行政資料は僅かです。

ゼロに近い状態から、取り組まざるを得ません。

終戦直後の新聞の紙面一枚一枚に目を通して、尖閣関連の記事を抜き出すことから始めました。

ある日、高良鉄夫博士が戦後初調査をし、新聞の投稿した記事を見つけました。1950年（昭和25年）、終戦から僅か5年後の吞まず食わず飢餓時代の調査です。この記事に瀬激され、すぐに学術調査に関心を持ちました。

高良博士は矢継ぎ早、調査団を組織して二次、三次と調査されていることが分かりましたが、これらの資料は、思うように集りません。

しばらくして高良博士と会う機会を得ました。

92歳のご高齢にも関わらず、頭脳明晰、矍鑠としておられました。

戦後初調査に驚き、興味をもった旨をお話し、「かくしかじかで、資料集めに苦労しています。先生の方で調査された資料をまとめられて下さい」とお願いしました。

先生、曰く「僕はもう年だ。若い君らで頑張りなさい。幾らでも協力するから」。この一言がきっかけとなり、2006年8月、勉強会の「編纂会」を立ち上げました。自主研究第一号として「高良学術調査団の調査事績」をテーマに、これに取り組んでみようとするようになりました。

いよいよ、調査活動のスタートです。

だが、戦後50年も経過しており、往時の調査団メンバーで亡くなった方もおり、残った方も高齢で、一人一人を探し当てたにしても、果たして、調査に応じてもらえるか不安でした。

幸い、高良先生が、同行されたメンバー、教え子たち（新納義馬会長ら）に協力を呼び掛けてくれました。

高良学術調査団（第1次～5次調査）関係者のお元気な方は35名ほどいました。全員にお願いして、調査回想した手記を書いてもらいました。

この調査成果物が「尖閣研究 高良学術調査団資料集上下巻」（2007年刊）で

す。本書は 1950 年代～60 年代、尖閣諸島初期調査に携わった関係者の「証言集」とも言え、これまで知られていなかった様々なことが紹介されています。

終戦直後の吞まず食わずの厳しい時代に、単独で調査（第一次予備調査）を敢行した。高良博士の先見性と行動力には驚かされる。翌々年の 52 年 4 月、第二次調査には資源の専門家を引き連れて行った。53 年 8 月、第三次は学生 11 名を参加させた調査だった。この 3 回にわたる調査をなし 遂げるには並々ならぬ苦労があった。とりわけ、第三次調査は沖縄経済人の協力で実現できたものともいえた。63 年 4 月、琉球政府文化財保護委員会から委託をうけて、アホウドリ調査を行った。これが第四次調査である。

68 年には沖縄懇高岡大輔氏を案内して第五次調査（鉱物資源予備調査、海鳥調査等）を行った。 （「発刊の辞：上巻」より）

ホームページの「調査成果物—おすすめの「尖閣研究」シリーズ」で、本書の「発刊の辞」「目次」、また「文献書庫」で、内容の一部を紹介しています。ぜひ、ご覧下さい。



高良先生囲んで、教え子たちが集い、53,4 年前の尖閣の思い出を語った。先生 93、教え子たちも 70～80 の高齢の途。(2006 年)

海人 100 名余から すべり込みセーフで 体験聞き取る

第一号の「高良学術調査団資料集」はどうか終えることができました。次の予定は漁業です。が、編纂会は自前運営の零細組織です。活動資金はとうに底を尽き、継続は危ぶまれていました。そんな矢先、日本財団に海に関する事業助成があることを知りました。

わらでも掴む思いで、申請しましたら、厳格な審査を経て、運よく、選考をパスして事業助成を頂き、調査活動を続けることができました。

これを契機に、高良先生を顧問相談役、新納義馬先生に会長になって頂き、編纂会を今の体制にしました。問題は、助成を頂いた漁業の調査です。

漁業は門外漢だけに、どう調査したらよいか分かりません。

沖縄各地の漁協を訪問し、海人を紹介してもらうことからスタートしました。

1972年復帰後、30年以上も経過し、尖閣に携わっていた海人の多くが亡くなっていました。学術調査団の調査以上に、出遅れ感がありました。

そんなこんなで、漁協のご理解と協力のもと、尖閣諸島に関わる漁業の資料収集、海人へ聞き取りを重ねていきました。

このお陰で、事業期間1年半をかけて、調査報告書をまとめることができました。



宮古島池間も尖閣で操業していた海人の村。往年のカツオ漁、曳縄、島での鯉節製造の話の聞き取りできた。左から与那嶺、濱川（組合長）、西里、仲間氏、(2009年)

この調査成果物が、「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告 ー沖縄県における戦前～日本復帰(1972年)の動き 2009年」(2010年刊)です。

ホームページには、本書の「目次」や内容の一部が紹介されています。

尖閣の漁業に関する情報が未整理だったため、本書の3分の2は基本資料が占めています。①「戦前尖閣諸島における漁業」には、尖閣諸島の領有以前と以後の文献資料、公文書官報なども収録。②「尖閣諸島海域における漁業調査」には、戦前戦後の沖縄県の漁場調査などです。残りの③「終戦～琉球政府期・尖閣海域における漁業」には、漁業の概要、漁業者への聞き取りです。

調査していく中で、聞き取り調査の重要さは痛感しつつも、時間をかけることができなかつたのが悔やまれました。

さらに、長老の海人たちに「来るのが遅すぎたよ」と叱られたことです。

これらを「あとがき」に記しました。

尖閣で漁をした・・海人に聞き取りをした時、大半が 80 代のお年寄でした・・今回の聞き取りの趣旨を話したら、開口一番、「もう、数年早く来ていたら、尖閣に詳しくった A も、B も元気だった。いろんな話が聞けたのに、今では遅過ぎる」と、言われました。72 年復帰の年から早 38 年が経ち、貴重な体験者は、高齢化し、年々亡くなりつつあります。往時の尖閣の海人に対する聞き取り調査は、緊喫の課題として、早期に取り組みねばならないことを痛感しました。
(「2009 年：あとがき」より)

これが幸でした。事業完了書を提出したあと、次は、どうしようかと困っていた矢先に、日本財団から次回も申請しなさいと言われ驚きました。

フリーパスです。飛び上がらんばかりに喜びました。

さらに次々回も、フリーパスです。結局、日本財団は、尖閣に携わった海人たちの聞き取りの大切さを認識して下さり、2009 年、2012 年、2014 年、2017 年と 4 回連続で助成を頂きました。

この特段のお陰で以て、尖閣に携わった海人 100 名余（延べ人数）をすべり込みセーフで聞き取り調査し、彼らの貴重な証言を記録することができました。

日本財団様には、心より篤く感謝いたしております。

これらの調査成果物が、「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 2012 年」「同 2014 年」「同、2017 年」です。本書から、これまで空白だった尖閣海域の漁業の歴史、開発利用の実態が明らかになりました。

尖閣諸島海域は、明治期から開発利用されたわが国の伝統的漁場でした。

海人たちの話から、島の周りでカツオが獲れるので、戦後も魚釣島ではカツオ節を製造するなど、海域は多くの漁船で賑わっていたことが分かりました。

また、国内有数の好漁場として日本各地からカツオ船やマグロ船、突ん棒、深海一本釣船等々が行き来し、また島の傍らでは、電灯潜りも見られ、様々な漁業が営まれていたことも、彼らの証言から明らかになりました。

ホームページの「文献書庫」には、これら一部を紹介しています。



尖閣で操業した海人 100 名余を聞き取ることができた。写真は鹿児島深海一本釣船「みつ丸」の宮崎船長（左 2 人目）と乗組員たち。（宮崎卓巳 2012）

先人たちが 残してくれた貴重な尖閣の「証言集」

私たち編纂会の調査活動は、尖閣諸島の実効支配の空白部分を埋める、即ち戦後の学術調査と漁業活動を調査し、その実態を明らかにすることでした。

その調査活動の成果物が「尖閣研究」です。

この5つの調査報告書には、尖閣調査に携わった学術調査関係者40名の手記、また尖閣海域で漁業に従事した海人関係者100名余の聞き取りが掲載されており、尖閣における貴重な体験をまとめた「証言集」です。

「尖閣研究」は、私たちの力量不足もあって、決して満足のいく内容ではありませんが、体験者の貴重な「証言」だけに、その力を絶大です。

中国の歴史的に何の根拠もない領有権主張、尖閣は自国領土だったというまやかしの領有権は、彼らの「証言」の前には、ひとたまりもありません。

すぐに根も葉もない捏造であると打ち砕かれます。

「尖閣研究」は、日本が実効支配してきた「歴史の証人たち」の貴重な「証言集」です。その「証人たち」は、高齢であるため年々減りつつあります。



第二次高良調査団 前列右より多和田、棚原、上運天
後列松元、高良各氏。お元気なのは上運天氏お一人。
(新垣秀雄 1952)



200メートル深海からマチ類を釣り上げる与那嶺氏
88歳高齢で聞き取り頂いた。数年前にご逝去。
(与那嶺三郎 1963)

今(2020年時点)では、学術調査35名は10数名に、漁業100名余は半分ほどに減ってしまい、しかも元気で往時を語れる方は、数えるばかりです。

今日では、「尖閣研究」は、彼ら「先人たち」が、後世の私たちに遺してくれた「遺言集」といっても過言ではありません。

島々に上陸して貝塚とか、城とかの跡があるか、石器や土器があるか、何でもよい とに角昔人間が住んだ証拠を一つでも探そうとしましたが

全くありません。つまり此処は昔からの全くの無人島だったのです。然し昔の人はこゝをユクン、クバ島ととなへ漁民や航海者はこれを知っていた様です。 (「尖閣研究」上巻 2007 多和田真淳)

つまり尖閣諸島は唐代この方、琉球にとって全くかけがえのない領土だと意識していたことは明かである。琉球の庶民は他国の領土に対して方言名をかぶせるような馬鹿げたことをした例がないことは、歴史に照してこれも明らかである。 (「尖閣研究」下巻 2007 多和田真淳)

あの頃(1950年)はねえ、今でいう中国船はいないです。1隻もいない。また、あの頃台湾船も度々来ていたねえ。しかし、この台湾船に乗っていたのは台湾の人達じゃないよ。・・こっちの人達で、この佐良浜(伊良部島)の人たちが台湾に出稼ぎに行つて、台湾で突船に乗っているわけ。出稼ぎにねえ・・あの頃、尖閣に来た船はその位のもんよお、中国船なんて全く見たこともない、話もない。

(「尖閣研究」2012年 奥原隆治)

2010年10月21日、中国外務省馬朝旭報道局長は、突如「尖閣諸島海域は、“中国漁民の伝統的漁場”である」と声明しました。これも「先人たちの証言」から、根も葉もない大嘘であることは明らかです。ちなみに、中国船が尖閣海域へ出漁するのは1980年以降です。

このように、こと領土問題、漁船の操業など国際的問題が生じた場合、彼らの証言集は、絶大な力を発揮すると考えます。

この事実からも、「尖閣研究」は、わが国の尖閣諸島に対する実効支配を国際裁判所において証左する重要な資料になるものと自負しています。

(続く)